優秀賞

誇りを持って働くということ

埼玉県 埼玉県立大宮高等学校二年　菊田 彩

私は今年の夏休み、生まれつきの病気で顎の大きな手術をし二週間入院しました。コロナ感染対策で面会制限という規則は、安心感よりも不安を助長し、寂しさが心の中の多くを占めます。

入院日案内されたカーテンで仕切られた六人部屋は、縦横三メートル程の正方形の小さなスペース。心細さは増し、私と入れ替わりに退院するという方と挨拶を交わす程度のつもりでいたのに、痛みと戦う中誰とも会えない閉鎖的な空間での怖さを伝えていました。気づいたら涙がぼろぼろとこぼれていて、そんな自分にびっくりしました。その夜、ナースコールが鳴り響く病棟で、短期間しか入院しない私に比べて、長期間入院を余儀なくされ日常とは違う境遇の人を周りに感じ、また涙が止まらなくなったのを強く覚えています。

いよいよ手術当日。そこまで緊張することなく、手術台に自分で上がったのは記憶にあります。麻酔が切れ酩酊状態から目を覚ますと、声が出ない！五、六人が私を取り囲んでいる状況に驚きました。私は集中治療室に運ばれ、要望を伝えたい際は枕元の紙とペンを使用します。痛みの用件のみでしか人と関われない状況は、何とも言えない苦痛とストレスが溜まっていきます。

ＩＣＵから自分の病室に戻ってからが大変でした。数日間は両腕に刺された点滴からの栄養と、寝たきり故の床ずれ。食事再開となっても三食全て、お粥にもなっていない米粒がない汁と具が無いお味噌汁と牛乳。トイレに行くのはもちろん看護師さんと一緒に。おむつで尿管も繋がっていたので、一回出すにもひと苦労でした。夜に寝返りを打つにも、布団をかける位置をずらしてほしい時も、ナースコールを押してしまっている状態でした。顔がパンパンに腫れていたので眼も開けられず、看護師さん達に申し訳ないという思いがある一方、辛くて泣き出したくなる夜が数日続きました。

私は今回、看護補助員という職業を知り、その存在の大きさを痛感しました。看護助手やナースエイドと呼ばれ、私が入院生活を乗り越える上でなくてはならない存在で、心身共に大変救われました。看護補助員さんは医師や看護師のように資格を必要としないので医療行為はしないのですが、患者のお世話や看護師のサポートも行い、医療看護チームの重要な一員だそうです。不安で仕方がなかった入院日、まず明るく笑顔で迎え入れて部屋の案内をしてくれたのは、看護補助員さんだったのです。それからも、常に何かと側で支えてくれていました。一人でシャワーに入れない時、髪も体も洗ってもらいました。羞恥心は不思議となく、身を任せることが出来たのも看護助手さんの気さくな雰囲気からです。洗髪は美容師が手を動かしているようでとても気持ち良く、顔の痛みを忘れられる時間でした。手術後四日目から始めたリハビリのための散歩は、入院生活の一番の楽しみとなっていました。点滴棒と共に体を支えてもらいながら、一緒にゆっくり歩きます。数日経つと三十分位中庭を目指しお喋りしながらのお散歩は、最高のリフレッシュタイムです。お仕事の話、高校の文化祭や好きなテレビ番組や趣味について、話題は尽きません。狭い部屋に一日中居るのは精神的にも窮屈になります。患者が多少なりとも入院生活を忘れる時間を作ってくれることに感謝してもしきれず、知らない職業がまだまだある事を思い知りました。

私は一人の看護補助員さんに聞きました。

「どうして毎日明るくいられるのですか？」

本当にその補助員さんは、全ての患者さんに対して明るく前向きな声かけをします。患者だけでなく、ナースステーション内が盛り上がっているなと思うと、中心には看護助手さんの姿が在ります。「元気を与えるのが私の役目」と、真っ直ぐな目で答えてくれた笑顔が眩しく、心に刺さりました。それから私は毎日目標を持とうという思いに駆られました。そう変わったことで食事をするにも動くにも活力が湧いてきて、元気が出たのです。将来の夢など大きな目標も大事だと思いますが、毎日一つ目標を立てて過ごすことで明日を迎えられるのだと思い知らされました。私も人の役に立ってやりがいだ、と胸を張って言える職に就きたいと今心から思っています。